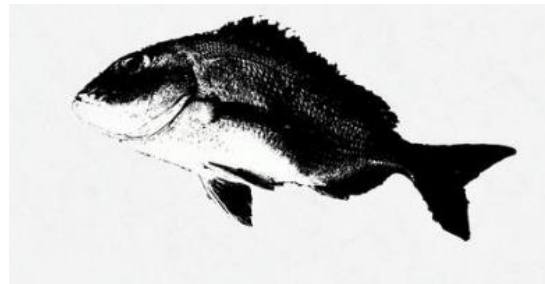


179 魚拓（2023 年 7 月 25 日）

私は以前にパリにある国立自然史博物館の方から、この博物館が日本の魚拓の寄贈を受けて、2019 年の欧州文化遺産の日（毎年 9 月の第三週末に欧州全体で実施される文化イベント。通常は非公開の文化財の特別公開、有料施設の無料公開や特別イベントが開催される。）に特別公開されたという話を聞いたことがありました。普段は目にすることができないため、博物館の方をお願いをして特別に長瀬望秋作の魚拓のコレクションを見学する機会をいただきました。

魚拓とは、墨や絵の具を使って、釣った魚の姿を紙や布に写したものです。19 世紀に、当時の庄内藩（現在の山形県の一部）で始まったものだと考えられています。徳川幕府による支配によって政治的に安定した時代でしたが、戦いの少ない時代にあっても武士の精神を忘れないようにするために、庄内藩では藩主の意向で、荒波の日本海で海釣りが奨励されました。一本の竿で釣り上げた大物の魚は、討ち取った敵の首に見立てて、魚拓にして藩主に献上されたと伝えられています。

博物館の方が準備してくださった紙に描かれた魚を見たときには、魚拓だと聞いていたものは、実は魚拓ではなく魚を描いた版画だったのではないかと疑いました。なぜなら、目に入ってきたものは、色彩豊かな魚の姿であったからです。魚拓と言えば、墨を使って魚の姿を紙に写し取るものだと考えており、写真右下のような白黒の魚の姿を予想していたからです。調べてみると、絵の具を使った色彩魚拓（カラー魚拓）もあることが分かりました。色彩魚拓は、濡らした紙で魚を覆い、小さく丸めた綿を布で包んだものに絵の具をつけ、それを軽く紙にたたきつけて彩色しながら、魚の形を写し取っていきます。彩色した紙を魚から剥がしたら、最後に目だけは筆で書き入れます。何度も彩色する作業を繰り返すことで、色の濃淡をつけることができます。



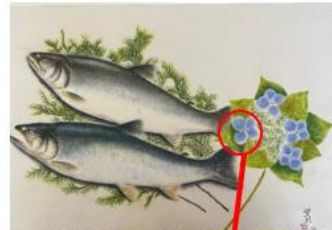
パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本



長瀬さんの魚拓を見て、色鮮やかな魚の美しさに目を奪われました。多色の絵の具を使い分けることで、本物以上に美しく見えます。一方で、近くで見ると、魚の鱗や鰭（ひれ）の形が目に見えます（写真左は拡大図）ので、本物の魚を使った魚拓であることがわかります。長瀬さんの色彩魚拓は、本物の魚のリアル感と芸術的な美しさを兼ね備えた魚の姿を

映し出しています。

色彩魚拓は、植物も同様の方法で彩色します。写真右の作品では、魚の背景に描かれたあじさいの葉脈や花脈を肉眼で確認することができます。



長瀬さんが、2011年にフランス北部のブルターニュ地方のコンカルノーにある魚類博物館で個展を開催したことがきっかけとなり、長瀬さんの作品を国立自然史博物館に寄贈するために2015年に「長瀬望秋友の会」が立ち上げられ、2019年に作品が博物館に寄贈され、作品の一部がその年の文化遺産の日に公開されました。



普段はなかなか目にすることが難しい作品ですが、多くの方が長瀬さんの色彩魚拓の作品を実際に目にして、写実性と芸術性を持ち合わせた魚の美しさを感じられる機会があることを願っています。